

こども芸術大学 瓜生山セミナー  
「みる・考える・話す・聞く」 レポート

アート・コミュニケーション研究センター 研究員  
北野諒

---



2012 / 1 / 27、京都造形芸術大学内の幼稚園 / 保育園相当の教育施設「こども芸術大学」にて、福のり子（芸術表現・アートプロデュース学科教授 / 本センター室長）が「みる・考える・話す・聞く」と題して、アートとコミュニケーションについてセミナーを行った。本レポートでは、その簡単な概要を紹介する。

瓜生山の自然と、板張りで暖かみがある建築という素晴らしい環境にある「こども芸術大学」。本セミナーは、こども達が元気に走り回中、20名におよぶお母さん方が参加され、開催された。

福はまず、「作品鑑賞と言いますと、美術史の勉強と勘違いされています」と口火を切り、「知識より、意識をもってみることを」を説いた。「ギリシャ彫刻が実は極彩色であった」という近年の発見や、「絵は、あらかじめ構想を決定してから制作されるものではない」というピカソの言葉を引用し、スライドで実際に画像を提示しつつ語った。「美術史」も「作家の意図」も絶対普遍のものではない、ということである。

次に、参加者の方に「キャッチボールの真似」をしてもらうという、福のレクチャーでは定番の「仕掛け」が行われた。福は「キャッチボールの真似をしてもらうと、人は『投げる』仕草をする。『受ける』格好をする人にはお目にかかったことがない」と言う。美術教育の現場においては長らく「作る人＝投げ手」ばかりが育成されてきており、「受け手」が育っていないのではないか、と問題提起した。

そして、そのような問題意識は、「美術」という枠を超えて、私たちの側に還ってくることになる。福は「投げ手と受け手なしで成り立たないもう一つのキャッチボール、それがコミュニケーション」であると、「アートとは、作品とみる人の間に起こる、不思議な現象、深遠なコト、素晴らしいコミュニケーションである」と語った。つまり、「作品をみることは、とりもなおさず「人を見ること」——私たちが普段行っているコミュニケーション——と深く関わっている、ということである。

そこから、恋愛における「恋は盲目」という例や、天安門事件での報道写真の各国における扱いの違いなどをとりあげながら、アートとコミュニケーションにおいて「事実と真実は違う」ことが示された。福は「真実は、みる人の数だけ存在する」とし、「アートとは、そこに存在しないなにかを、そこにみるから生まれてくるのです」と語った。

つまるところ、アートとコミュニケーションは「誤解と妄想」である一方、そこには常に「訂正の道」が開かれている。私たちは「誤解と妄想」を他者に投げて、他者から受けて、そこにズレが生じればまた修正して……その繰り返しである。

福は「作品を殺すも活かすも、鑑賞者。主体的な参加者の存在がアートにとって不可欠なのです。これはコミュニケーションや教育においても同じです」と結論し、セミナーはそのまま参加者の方とのACOPに移行した。恐らくほとんどの方が、対話による作品鑑賞は初体験であったであろう。最初は参加者の方から戸惑いも感じられたが、作品と言葉を一つ一つ吟味していくACOPに場が馴染んで行き、最後は予定の時間を大幅に超過する盛り上がりのうちに終了した（それでも「まだ話せる」という雰囲気であったが）。

1時間と少し、という短い時間ではあったが、参加されたお母さん方はどのように今回のセミナーを「受けて」くださっただろうか。いくつか感想を挙げてみたい。

**「アートとキャッチボールとコミュニケーション、相手（他人）がいるからこそ成立する関係という共通点があることにもうなずけました」**

**「私ひとりで観たらこんなにもたくさんの物語は生まれてきませんでした。ふだんの母たちや他の人たちとのコミュニケーションの中でも、人の意見を聞くことによってより自分の考えが鮮明になることがあります」**

**「今日のWSで、こども同士のいろんな関係や日々の事象も、いろんな面から多様に見られるということを意識しました」**

**「同じものを見ていても考えていることは違う。当然なのに、いろいろな状況で自分の考えを中心に周りをルールづけようとしている。それもまた当然なのだけど、人との差異を受け入れて理解すれば、世界が広がる」**

「こどもこそ未来」とは、こども芸術大学の校舎一階に刻まれた銘であるが、こどもとはまた、最も身近にいる最も遠い「他者」でもあるだろう。今回のセミナーが「アートとコミュニケーション」というテーマに収まらず、日常のふとした関わりの瞬間に思い返して頂けるようになれば幸いである。